



熊本県初の 酒米品種



目次

ラボから新技術

- 水稲苗質を遮根処理で改善 P.2
- トビイロウンカの防除法 P.3
- トルコギキョウRTF苗 P.4

「華錦」

本県では約100haで酒米が生産され、県内酒造会社において、原料として活用されています。これまでの品種は、吟醸酒や純米酒に優れた醸造適性を持つ反面、収量性が低い等の課題がありました。

そこで、県産米と県産酒の更なる振興につなげるため、収量が多く、かつ酒造適性に優れた県オリジナル品種を開発しました。

「華錦」は、倒伏に強い良質の酒造好適米を目標に、平成12年から当センターにおいて人工交配を行い育成しました。

特徴としては、酒造適性に優れ全国でも評価の高い「山田錦」に比べ丈が短くて倒伏しにくく、安定した収量が得られます。また、玄米の粒は大粒で、心白の発現も良好であり、醸造適性に優れています。

本品種は、平坦地から高冷地においてH27年産から作付けが行われる予定です。

(農産園芸研究所作物研究室)



イベント情報

(1~3月)

●茶業研究所

・2/18 13:15~16:40

「熊本県茶振興大会」

主催:くまもと茶ブランド確立
対策協議会

場所:熊本県経済連

発表成果

・侵入害虫「チャゲコナジラミ」の発生状況と総合的な防除体系について

●天草農業研究所

・2/19 13:30~16:00

「天草地域農業普及・振興活動及び試験研究成果発表会」

主催:天草地域振興局
天草農業研究所

場所:天草市民センター

発表成果

・天草地域におけるシストセンチュウ抵抗性パレイショ品種「アイユタカ」の特性
・天草地域におけるライチの特性について

詳しくは、各研究所にお問い合わせください。

～無人ヘリ撮影による農研の今～



飼料用トウモロコシ収穫の様子

ラボから新技術

稼げる農業を目指した革新的な生産技術の開発

1

「遮根処理」で育苗箱全量施肥栽培の水稲苗質を改善

水稲の施肥については、苗を作る段階で育苗箱に緩効性の窒素を全量施肥する栽培法が確立しています。この「育苗箱全量施肥栽培」はコスト・省力性ならびに環境面から優れた栽培技術ですが、熊本県における普通期栽培では、気温が高いため苗が伸びすぎたり、ルートマット（根の張り）の形成が弱く、技術の現地普及の妨げになっています。

そのため、「育苗箱全量施肥栽培」の苗質を改善する技術の開発に取り組みました。

水田を苗床とする育苗箱全量施肥では、苗土と苗箱の間にシートを敷く等の遮根処理（根域制限）をすることによって、以下の3つの点で苗質改善並びに省力化を図ることができます。

1. 苗が伸びすぎない

遮根処理を行うと遮根処理をしない場合に比べて移植時の苗丈は4~6cm短くなり、徒長が抑制されます。



2. ルートマットが充実

遮根処理をしない場合は苗床の土壌まで根が伸長するのに対し、遮根処理の場合は根は苗箱内にとどまり、マット形成が充実します。



3. 作業が楽に

遮根処理を行うと苗床に根が張らないため、移植時に苗床から育苗箱を剥ぎ取る作業が極めて楽になります。また、その後の、育苗箱下面に残る余分な根を剥ぎ取る作業も不要となります。

生産環境研究所
土壌肥料研究室
松森研究参事
(現)農業技術課
農業技術支援室



技術の詳細はコチラへ <H26 農業の新しい技術>

<http://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/91462.pdf>

ラボから新技術

稼げる農業を目指した革新的な生産技術の開発

2

多収米ではトビイロウンカの防除が欠かせない

飼料用や米粉用に栽培される多収米は、主食用米品種に比べてトビイロウンカの生息密度が高くなるのがわかっています。

しかし、多収米におけるトビイロウンカの被害や防除法については不明な点が多くあります。

そこで、移植時期別のトビイロウンカの発生や薬剤の効果を検討し、多収米の収量確保に必要な防除技術を確立しました。

1. 移植時期と坪枯れ発生

6月上旬～中旬に移植した多収米は、防除なしではトビイロウンカによる坪枯れが起り、減収します。

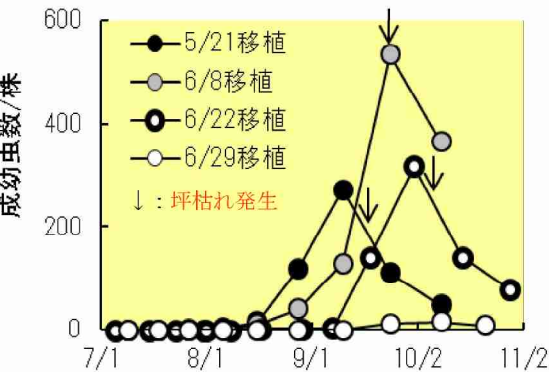


図1 移植時期の違いによるトビイロウンカの発生(2012年、無防除)

2. 適切な箱施薬剤

フィプロニルまたはピメトロジンを含む箱施薬剤は、トビイロウンカに対して高い防除効果を示します。

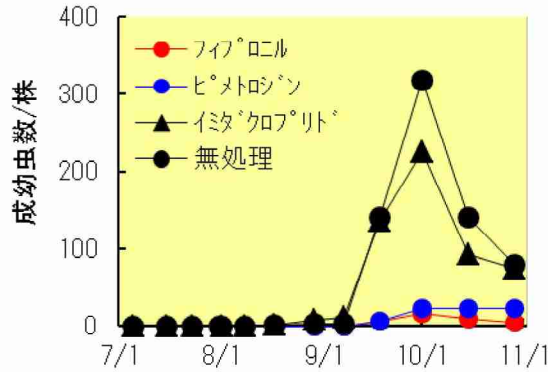


図2 トビイロウンカに対する箱施薬剤の防除効果 (移植日：2012年6月22日、本田防除なし)

3. 適期の本田防除

本田防除は、適期（トビイロウンカの若齢幼虫期）に粒剤を処理すると高い効果を示します。（適期以外は、効果が期待できません。）

体系防除（適切な箱施薬剤＋適期の本田防除）が基本です。

<ウンカ類の飛来時期や発生状況に関する情報>

病害虫防除所HP：<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto>

<飼料用米防除に関する情報>

飼料用米の生産・給与技術マニュアル：

http://www.naro.affrc.go.jp/nilgs/project/jiky_pro/029451.html

生産環境研究所

病害虫研究室

樋口研究主任



「トビイロウンカ」とは

体色は全体に脂ぎった褐色で、増殖能力が高く、飛来虫の密度が1株当たり0.1頭程度と低くても、第3世代期には1株当たり100頭以上になることもあり、爆発的に増殖します。

国内では越冬できず、梅雨期に中国大陸からジェット気流によって成虫が日本に飛来します。飛来した成虫（長翅）は水田内で世代を繰り返して増殖します。



トビイロウンカ（長翅成虫）

トビイロウンカは長い口（口吻）をイネに直接差し込んで水分や栄養分を吸いとります。幼虫や短翅型成虫はあまり移動しないので、株あたりの寄生虫が急激に増加し、特に収穫期以降多発するとほ場の一部が急激に萎縮して枯れるため、坪枯れと呼ばれる被害となります。枯れたイネから隣へ少しづつ移動するため同心円状に枯れて行き、ひどい場合はほ場全体が枯れてしまいます。



寄生の様子（短翅の♀成虫）



坪枯れを起こした水稲



技術の詳細はコチラへ <H26 農業の新しい技術>

<http://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/91206.pdf>

**当センター育成
湿地性カラーの
ブランド名決定！**

当センター農産園芸研究所が育成した湿地性カラーの新品種「熊本FC01」「熊本FC02」。平成24年に品種登録され、産地化を進めてきました。

今回、この2品種の販売開始にあたり、消費者に広く愛されるよう、それぞれにふさわしいブランド名が一般公募され、決定されました。

**熊本FC01:
「ホワイトトーチ」**

純白で聖火のトーチのようなすらりとした形を表現



**熊本FC02:
「ホワイトスワン」**

純白で白鳥のような優美な姿を表現



ラボから新技術
稼げる農業を目指した革新的な生産技術の開発 **3**

**RTF苗を利用した
トルコギキョウ切り花の栽培体系**

これまでに、トルコギキョウの抑制栽培で、花芽分化ができる態勢にある(RTFという)苗を定植することで計画生産と商品化率の向上が図られることを明らかにしました。

今回はこの技術の活用効果の最大化と円滑な普及を図るため、現場の育苗施設の状況に応じたRTF苗を育苗するための管理技術を、下表のとおり整理しました。

処理レベル	冷房育苗施設状況	RTF処理	効果
レベル1	<ul style="list-style-type: none"> 共同育苗 育苗施設が狭い(288穴セルトレイが置けない) 冷房能力が低い(昼温を25℃以下にできない) 	<ul style="list-style-type: none"> 保肥力の高い育苗培土を使用 生育ステージに合わせたこまめな液肥施用(底面吸水による溶脱防止) 抽だい揃い時の適期定植 定植期に合わせた(早晩性)品種の選定 	<ul style="list-style-type: none"> 生育が揃う 開花遅延防止(農業の新しい技術No. 650参照) 暖房費削減
レベル2 a	<ul style="list-style-type: none"> 面積に余裕がある(288穴セルトレイが置ける) 冷房能力が低い(昼温を25℃以下にできない) 	レベル1のRTF処理プラス ・288穴セルトレイでの底面吸水育苗(底面吸水による溶脱防止)	<ul style="list-style-type: none"> レベル1より良質の苗で秀品率が向上する(農業研究成果情報No. 631参照)
レベル2 b	<ul style="list-style-type: none"> 冷房能力が高い(昼温を25℃以下にできる) 育苗施設が狭い(288穴セルトレイが置けない) 	レベル1のRTF処理プラス ・生育ステージに合わせた温度管理 ・本葉2対半から3対展開以降の昼温25℃以下	<ul style="list-style-type: none"> レベル1より良質の苗で切り花規格が長くなる(農業研究成果情報No. 630参照) 予定する定植日に定植が可能
レベル3	<ul style="list-style-type: none"> 面積に余裕がある(288穴セルトレイが置ける) 冷房能力が高い(昼温を25℃以下にできる) ※2段階育苗施設の保有でも可	レベル2 a と 2 b 両方のRTF処理	<ul style="list-style-type: none"> 品質の安定した切り花の計画的生産が可能

農産園芸研究所
花き研究室
工藤研究参事



技術の詳細はコチラへ <H26 農業の新しい技術>
農産園芸研究所 花き研究室 担当：工藤 ☎：096-248-6444

農研NOW 冬号 平成27年1月



〒861-1113
熊本県合志市栄3801
tel 096-248-6411
fax 096-248-7039
www.pref.kumamoto.jp/site/493
noukenkikaku@pref.kumamoto.lg.jp

本紙の内容に関するお問い合わせは、
企画調整部 情報課 まで
ご連絡ください

管理部
総務課
経理課
096-248-6412

企画調整部
企画課
情報課
096-248-6423

農産園芸研究所
作物研究室
矢部試験地
バイオ育種研究室
花き研究室
野菜研究室
096-248-6444

生産環境研究所
環境保全研究室
土壌肥料研究室
施設経営研究室
病害虫研究室
096-248-6447

畜産研究所
大家畜研究室
中小家畜研究室
生産基礎技術研究室
飼料研究室
096-248-6433

茶業研究所
096-282-6851

い業研究所
育種・栽培研究室
加工・機能性研究室
野菜栽培研究室
0965-52-0372

草地畜産研究所
0967-32-1231

果樹研究所
常緑果樹研究室
落葉果樹研究室
病虫化学研究室
0964-32-1723

高原農業研究所
0967-22-1212

球磨農業研究所
0966-45-0470

天草農業研究所
0969-22-4224